

第 4 章

位相的場の理論の展開：SPT 相の分類

この節で登場する多様体は特に断らない限り常に C^∞ 多様体である。また、体 \mathbb{K} と言ったら $\mathbb{K} = \mathbb{R}, \mathbb{C}, \mathbb{H}$ のいずれかを指す。

4.1 SPT 相の定義

この節では常に $d := D + 1$ 次元時空 $\mathcal{M}^{(d)} = \Sigma^{(D)} \times \mathbb{R}$ または $\Sigma^{(D)} \times S^1$ を考える。混乱が生じない時は時空点を $x := (\mathbf{x}, t) \in \Sigma^{(D)} \times \mathbb{R}$ と書く。 D 次元多様体 $\Sigma^{(D)}$ はノルム $\|\cdot\|$ を持つ距離空間であるとする。

- $\Sigma^{(D)}$ 上の D 次元格子 (lattice) $\Lambda \subset \Sigma^{(D)}$ とは、 $\Sigma^{(D)}$ の有限な離散部分集合のことである。
- 格子点 $\mathbf{x} \in \Lambda$ 上の Hilbert 空間を $\mathcal{H}_{\mathbf{x}}$ と書く。
- 全系の Hilbert 空間とは、合成系 $\mathcal{H}_{\text{tot}} := \bigotimes_{\mathbf{x} \in \Lambda} \mathcal{H}_{\mathbf{x}}$ のことである。

定義 4.1: bosonic な格子模型

- $\forall \mathbf{x} \in \Lambda$ を 1 つとる。別の格子点 $\mathbf{y} \in \Lambda$ が \mathbf{x} についてレンジ $R > 0$ であるとは、 $\|\mathbf{x} - \mathbf{y}\| \leq R$ が成り立つことを言う。 \mathbf{x} についてレンジ R な格子点全体の集合を $N_R(\mathbf{x}) \subset \Lambda$ と書く。
- 格子 Λ 上のレンジ $R > 0$ の (量子的) **bosonic な格子模型** とは、 $\forall \mathbf{x} \in \Lambda$ に対して、 $\forall \mathbf{y} \in N_R(\mathbf{x})$ における局所的 Hilbert 空間 $\mathcal{H}_{\mathbf{y}}$ へのみ非自明に作用するエルミート演算子 $\hat{h}_{\mathbf{x}} \in \text{Hom}_{\text{Hilb}}(\mathcal{H}_{\text{tot}}, \mathcal{H}_{\text{tot}})$ が存在して、

$$\hat{H} = \sum_{\mathbf{x} \in \Lambda} \hat{h}_{\mathbf{x}}$$

と書かれるエルミート演算子 $\hat{H} \in \text{Hom}_{\text{Hilb}}(\mathcal{H}_{\text{tot}}, \mathcal{H}_{\text{tot}})$ のこと。

bosonic な格子模型の基底状態を **bosonic な基底状態** と呼ぶ。

*1 時間方向は必要に応じてコンパクト化する

*2 closed でなくとも良い。

*3 空間多様体 $\Sigma^{(D)}$ や局所 Hilbert 空間に適当な境界条件を課して有限にする。

定義 4.2: gapped な格子模型

bosonic な格子模型 \hat{H} が **gapped** であるとは、熱力学極限を取った際に基底状態 E_0 と第一励起状態 E_1 の間に有限のエネルギーギャップ $\Delta := E_1 - E_0 > 0$ が存在し、かつ基底状態が一意であることを言う。

熱力学極限 $|\Lambda| \rightarrow \infty$ をとった $\Sigma^{(D)}$ 上の **bosonic な格子模型** 全体の集合を $\mathbf{Lat}(\Sigma^{(D)}) \subset \text{Hom}_{\mathbf{Hilb}}(\mathcal{H}_{\text{tot}}, \mathcal{H}_{\text{tot}})$ と書き、^{*4} $\mathbf{Lat}(\Sigma^{(D)})$ の元の基底状態全体の集合を $\mathbf{Gnd}(\Sigma^{(D)}) \subset \mathcal{H}_{\text{tot}}$ と書く。 $\mathbf{Lat}(\Sigma^{(D)})$ にコンパクト開位相^{*5}を入れて位相空間にする。[?, p.3] に倣い、量子相 (quantum phase) を以下のように定義する：

定義 4.3: bosonic な量子相

2つの **bosonic な格子模型** $\hat{H}_0, \hat{H}_1 \in \mathbf{Lat}(\Sigma^{(D)})$ を与える。

- \hat{H}_0 の基底状態 $|\Phi_0\rangle \in \mathbf{Gnd}(\Sigma^{(D)})$ と \hat{H}_1 の基底状態 $|\Phi_1\rangle \in \mathbf{Gnd}(\Sigma^{(D)})$ が同じ量子相 (quantum phase) にあるとは、 C^∞ 曲線 $\hat{H}: [0, 1] \rightarrow \mathbf{Lat}(\Sigma^{(D)})$ が存在して $\hat{H}(0) = \hat{H}_0$ かつ $\hat{H}(1) = \hat{H}_1$ を満たすこと。これは $\mathbf{Gnd}(\Sigma^{(D)})$ 上の同値関係 \sim をなす。
- 商集合 $\mathbf{Gnd}(\Sigma^{(D)})/\sim$ の元のことを量子相と呼ぶ。

4.1.1 SRE 状態と LRE 状態

まず、[?, p.3] に倣って **SRE 状態** (Short Range Entangled states) と **LRE 状態** (Long Range Entangled states) を定義する。[?, p.4]

予想 4.1: Chen-Gu-Wen の仮説

bosonic かつ **gapped** な2つの基底状態 $|\Phi_0\rangle, |\Phi_1\rangle$ が同じ量子相にあるならば、以下の条件を満たす **bosonic な格子模型** の族 $\{\hat{H}(t)\}_{t \in [0, 1]}$ が存在する：

- $\forall t \in [0, 1]$ に対して、 $\hat{H}(t)$ の基底状態は熱力学極限を取った際に **gapped** である。
- $|\Phi_0\rangle, |\Phi_1\rangle$ はそれぞれ $\hat{H}(0), \hat{H}(1)$ の基底状態である。

^{*4} \mathcal{H}_{tot} は一般には熱力学極限の取り方に依存する。

^{*5} operator norm による距離位相としても良い。

命題 4.1: LU transformation

以下の 2 つは同値である：

- (1) bosonic かつ gapped な 2 つの基底状態 $|\Phi_0\rangle, |\Phi_1\rangle$ が同じ量子相にある
- (2) bosonic な格子模型の族 $\{\hat{H}(t)\}_{t \in [0,1]}$ が存在して

$$|\Phi_1\rangle = \mathcal{T}[e^{-i \int_0^1 dt \hat{H}(t)}] |\Phi_0\rangle \quad (4.1.1)$$

を充たす。ただし \mathcal{T} は経路順序積である。

証明 (\implies)

仮説 4.1 による。

(\impliedby)

■

(4.1.1) を局所ユニタリ発展 (local unitary evolution) と呼ぶ。

定義 4.4: SRE 状態

bosonic かつ gapped な基底状態 $|\Phi\rangle \in \text{Gnd}(\Sigma^{(D)})$ が **SRE 状態** (short range entangled state) であるとは、ある separable な状態

$$\bigotimes_{\mathbf{x} \in \Lambda} |\psi_{\mathbf{x}}\rangle \quad \text{w/} \quad \forall \mathbf{x} \in \Lambda, |\psi_{\mathbf{x}}\rangle \in \mathcal{H}_{\mathbf{x}}$$

と $|\Psi\rangle$ との間に局所ユニタリ発展が存在すること。

SRE 状態でない基底状態のことを **LRE 状態** (long range entangled state) と呼ぶ。

定義から明らかに、任意の SRE 状態は同一の量子相に属する。

4.1.2 Bosonic SPT 相

SRE 状態の定義はそのままだと面白くないが、対称性を考慮すると話は変わってくる。位相群 G を与える。また、格子 Λ は空間群 S の対称性を持つ^{*6}とする。

^{*6} S の Λ への左作用を $\blacktriangleright: S \times \Lambda \longrightarrow \Lambda$ と書く。

定義 4.5: 外部半直積

N, H を群とし, $\phi: H \rightarrow \text{Aut } N$, $h \mapsto \phi_h$ を準同型写像とする^a. このとき, 集合 $N \times H$ は次の二項演算 $\cdot: N \times H \rightarrow N \times H$ に関して群を成す:

$$(n_1, h_1) \cdot (n_2, h_2) := (n_1 \phi_{h_1}(n_2), h_1 h_2)$$

この群 $(N \times H, \cdot, (1_N, 1_H))$ のことを N, H の (外部) **半直積** (semidirect product) と呼び, $H \ltimes_{\phi} N$ または $N \rtimes_{\phi} H$ と書く.

^a $\text{Aut } N$ は, N から N 自身への同型写像全体の集合に, 写像の合成を群の演算として群構造を入れたもので, **自己同型群** (automorphism group) と呼ばれる.

定義 4.6: G -対称な格子模型

bosonic な格子模型 \hat{H} が **G -対称** [?, p.12] であるとは,

- 群準同型 $\rho_{\text{spa}}: G \longrightarrow S$
- 群準同型 $\phi_{\text{int}}: G \longrightarrow \{\pm 1\}$
- 群のユニタリ or 反ユニタリ表現 $\rho_{\text{int}}: G \ltimes_{\rho_{\text{spa}}} S \longrightarrow \{\text{unitary or antiunitary operator } \mathcal{H}_{\text{tot}} \rightarrow \mathcal{H}_{\text{tot}}\}$

が存在して以下を充たすことを言う:

(Gsym-1)

$\forall g \in G$ に対し,

$$\phi_{\text{int}}(g) = \begin{cases} +1, & \rho_{\text{int}}(g) \text{ is unitary} \\ -1, & \rho_{\text{int}}(g) \text{ is antiunitary} \end{cases}$$

(Gsym-2)

群 G の \mathcal{H}_{tot} への作用

$$\begin{aligned} \rho: G &\longrightarrow \text{GL}(\mathcal{H}_{\text{tot}}), \\ g &\longmapsto \left(\bigotimes_{\mathbf{x} \in \Lambda} |\psi_{\mathbf{x}}\rangle \longmapsto \bigotimes_{\mathbf{x} \in \Lambda} \rho_{\text{int}}(g, \rho_{\text{spa}}(g)^{-1} \blacktriangleright \mathbf{x}) |\psi_{\rho_{\text{spa}}(g)^{-1} \blacktriangleright \mathbf{x}}\rangle \right) \end{aligned}$$

に関して,

$$\forall g \in G, \quad [\hat{H}, \rho(g)] = 0$$

が成り立つ.

G -対称な格子模型 全体の集合を $\mathbf{Lat}_G(\Sigma^{(D)}) \subset \text{Lat}(\Sigma^{(D)})$ と書き^{*7}. その基底状態全体の集合を $\mathbf{Gnd}_G(\Sigma^{(D)}) \subset \text{Gnd}(\Sigma^{(D)})$ と書く.

^{*7} $\text{Lat}(\Sigma^{(D)})$ からの subspace topology を入れる.

定義 4.7: G -同変な量子相

2つの **bosonic** かつ **G -対称な格子模型** $\hat{H}_0, \hat{H}_1 \in \text{Lat}_G(\Sigma^{(D)})$ を与える.

- \hat{H}_0 の基底状態 $|\Phi_0\rangle \in \text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)})$ と \hat{H}_1 の基底状態 $|\Phi_1\rangle \in \text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)})$ が同じ **G -同変な量子相** (G -equivalent quantum phase) にあるとは, C^∞ 曲線 $\hat{H}: [0, 1] \rightarrow \text{Lat}_G(\Sigma^{(D)})$ が存在して $\hat{H}(0) = \hat{H}_0$ かつ $\hat{H}(1) = \hat{H}_1$ を満たすこと. これは $\text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)})$ 上の同値関係を成す.
- 商集合 $\text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)}) / \sim$ の元のことを **G -同変な量子相**と呼ぶ.

定義 4.8: SPT 相 (Chen-Gu-Wen による)

bosonic かつ **gapped** かつ **G -同変な量子相** $[[\Phi]] \in \text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)})$ が **SPT 相** (symmetry protected topological phase^a) であるとは, $\forall |\Psi\rangle \in [[\Phi]]$ が **SRE 状態**であることを言う.

^a symmetry protected trivial phase と呼ぶこともある [?].

つまり, 任意の代表元が G -対称性を破れば separable な状態に滑らかにつながるような **量子相**のことを SPT 相と呼ぶ. SPT 相の名前はこのことに由来する.

4.1.3 Fermionic SPT 相

4.2 Bosonic SPT 相の分類: 群コホモロジーによる方法

[?, p.16, VIII] は, Dijkgraaf-Witten 理論を用いて^{*8}かなり多くの **SPT 相**を書き下す系統的な方法を発明した. この節ではその方法を紹介する.

簡単のため, **G -対称な格子模型**のうち群準同型 ρ_{spa} が自明なもの^{*9}のみ考える. また, G は局所コンパクト^{*10}であるとする. このとき G は Haar 測度を持つのでそれを $\int_G dg$ とおく. このとき, 非ゼロな $|\psi\rangle \in \mathcal{H}_x$ を 1 つ固定して $\forall g \in G$ に対して

$$|g\rangle := \rho_{\text{int}}(g) |\psi\rangle$$

とおくと, Haar 測度の左右不変性から族 $\{|g\rangle\}_{g \in G}$ は**一般化コヒーレント状態**を成す. ここで $\forall \{g_x\}_{x \in \Lambda} \in \prod_{x \in \Lambda} G$ に対して

$$|\{g_x\}_{x \in \Lambda}\rangle := \bigotimes_{x \in \Lambda} |g_x\rangle \in \mathcal{H}_{\text{tot}}$$

とおこう. さらに以下では G は**離散群**であるとする.

^{*8} 彼女らの元論文では Dijkgraaf-Witten 理論とは言わずに topological θ -term と呼んでいる.

^{*9} i.e. $\forall g \in G$ に対して $\rho_{\text{spa}}(g) = 1_S$

^{*10} 任意の点がコンパクト近傍を持つ

命題 4.2: SPT 相の構成

- 空間多様体 Σ を境界にもつ $D+1$ 次元多様体 $\mathcal{N}^{(D+1)}$
- $\mathcal{N}^{(D+1)}$ の三角形分割 $|K| \xrightarrow{\sim} \mathcal{N}^{(D+1)}$ であって, その 0-単体 (頂点) K_0 が $\partial\mathcal{N}^{(D+1)}$ において格子 Λ を再現するもの
- $\omega \in H_{\text{Grp}}^{D+1}(G, \text{U}(1))$

をとる. このとき

$$|\Psi\rangle_\omega := \frac{1}{|G|^{|\Lambda|}} \sum_{\{g_j\}_{j \in K_1}} \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \omega(g_{j_0}, \dots, g_{j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}} \left| \{g_x\}_{x \in \Lambda} \right\rangle$$

は **SPT 相** の代表元である. ただし $\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}$ は $D+1$ -単体 $\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}$ の向きである.

証明 まず, $|\Psi\rangle_\omega$ が **G-対称** であることを示す. 実際 $\forall \{g_x\}_{x \in \Lambda} \in \prod_{x \in \Lambda} G$ および $\forall g \in G$ に対して

$$\begin{aligned} \left\langle \{g_x\}_{x \in \Lambda} \left| \rho(g) \right| \Psi \right\rangle_\omega &= \left\langle \{g_x\}_{x \in \Lambda} \left| \bigotimes_{x \in \Lambda} \rho_{\text{int}}(g) \right| \Psi \right\rangle_\omega \\ &= \left\langle \{g^{-1} g_x\}_{x \in \Lambda} \left| \Psi \right\rangle_\omega \right. \\ &= \frac{1}{|G|^{|\Lambda|}} \sum_{\{g_j\}_{j \in K_0 \setminus \Lambda}} \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \omega(g_{j_0}, \dots, g_{j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}} \\ &= \left\langle \{g_x\}_{x \in \Lambda} \left| \Psi \right\rangle_\omega \right. \end{aligned}$$

が成り立つ. ただし 3 つ目の等号でコサイクルの左不変性を使った.

次に, $|\Psi\rangle_\omega$ が **SRE 状態** であることを示す. 簡単のため $\Sigma = S^D$, $\mathcal{N}^{(D+1)} = D^{D+1}$ の場合を考える^{*11}. このとき $K_1 \setminus \Lambda = \{*\}$ となるような三角形分割をとることができて,

$$\begin{aligned} |\Psi\rangle_\omega &= \left(\sum_{\{g_x\}_{x \in \Lambda}} \prod_{\{j_0, \dots, j_D, *\} \in K_{D+1}} \omega(g_{j_0}, \dots, g_{j_D}, g_*) \left| \{g_x\}_{x \in \Lambda} \right\rangle \right) \bigotimes_{x \in \Lambda} \left(\frac{1}{|G|} \sum_{g_x \in G} |g_x\rangle \right) \\ &= \left(\prod_{\{j_0, \dots, j_D, *\} \in K_{D+1}} \sum_{\{g_{j_n}\}_{n=0}^D \in G^{D+1}} \omega(g_{j_0}, \dots, g_{j_D}, g_*) \left| \{g_{j_n}\}_{n=0}^D \right\rangle \right) \bigotimes_{x \in \Lambda} \left(\frac{1}{|G|} \sum_{g_x \in G} |g_x\rangle \right) \end{aligned}$$

と書けるので **SRE 状態** である.

最後に, $|\Psi\rangle$ が属する **SPT 相** が $\omega \in H_{\text{Grp}}^{D+1}(G, \text{U}(1))$ の代表元の取り方によらないことを示す. 実際, D -コチェイン $\eta \in C_{\text{Grp}}^D(G, \text{U}(1))$ に対して $\omega \mapsto \omega \cdot \delta\eta$ と取り替えると

$$|\Psi\rangle_{\omega \cdot \delta\eta} = \left(\prod_{\{j_0, \dots, j_D, *\} \in K_{D+1}} \sum_{\{g_{j_0}, \dots, g_{j_D}\} \in G^{D+1}} \eta(g_{j_0}, \dots, g_{j_D}) \left| \{g_{j_n}\}_{n=0}^D \right\rangle \right) |\Psi\rangle_\omega$$

となるが, この変換は明らかに $\rho(g)$ と可換なので G -同変な **局所ユニタリ発展** である. ■

^{*11} 一般の場合でも, C^∞ 多様体は CW 複体の構造を持つので問題ないと思われる.

Dijkgraaf-Witten 理論との関係は、大域的 G -対称性をゲージ化することにより明らかになる [?, AP-PENDIX E]. ゲージ化によって、 $\mathcal{N}^{(D+1)}$ の三角形分割の 1-単体 (辺) $e \in K_1$ 上に G の元 h_e が指定される. ただし, G が離散群なので h_e は平坦接続でなくてはならない. よってもし 3 つの 1-単体 e_1, e_2, e_3 がある 2-単体 d について $\partial_i^2(d) = e_i$ を充たすならば

$$h_{e_1} h_{e_2} h_{e_3} = 1_G$$

が成り立たねばならない. また, 「物質場」 g_x とゲージ場 h_e のゲージ変換は, $\{k_x\}_{x \in K_0} \in G^{|K_0|}$ を用いてそれぞれ

$$\begin{aligned} g_x &\mapsto k_x g_x, \\ h_e &\mapsto k_{\partial_1^{-1}(e)}^{-1} h_e k_{\partial_0^1(e)} \end{aligned}$$

のようになる. 故に, 命題 4.2 の構成で用いた「物質場」の分配関数

$$Z(\{g_i\}_{i \in K_0}; \mathcal{N}^{(D+1)}) := \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \omega(g_{j_0}, \dots, g_{j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}}$$

は G -対称性のゲージ化によって

$$\begin{aligned} &Z_{\text{gauged}}(\{g_i\}_{i \in K_0}, \{h_e\}_{e \in K_1}; \mathcal{N}^{(D+1)}) \\ &= \frac{1}{|G|^{| \Lambda |}} \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \omega(g_{j_0}, h_{j_0 j_1} g_{j_1}, h_{j_0 j_1} h_{j_1 j_2} g_{j_2}, \dots, h_{j_0 j_1} \dots h_{j_D j_{D+1}} g_{j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}} \\ &= \frac{1}{|G|^{| \Lambda |}} \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \alpha(g_{j_0}^{-1} h_{j_0 j_1} g_{j_1}, g_{j_1}^{-1} h_{j_1 j_2} g_{j_2}, \dots, g_{j_D}^{-1} h_{j_D j_{D+1}} g_{j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}} \end{aligned}$$

になる. ゲージ場を外場と見做すことにより Dijkgraaf-Witten 理論の作用が得られる:

$$\begin{aligned} &\sum_{\{g_j\}_{j \in K_1}} Z_{\text{gauged}}(\{g_i\}_{i \in K_0}, \{h_e\}_{e \in K_1}; \mathcal{N}^{(D+1)}) \\ &= \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \alpha(h_{j_0 j_1}, h_{j_1 j_2}, \dots, h_{j_D j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}} \\ &= e^{2\pi i \langle \gamma^* \alpha, \square \rangle} \end{aligned}$$

以上の議論により, D 次元の bosonic な^{*12}SPT 相の分類は $H_{\text{Grp}}^{D+1}(G, \text{U}(1))$ によって成される, などと言う [?].

4.3 Bosonic SPT 相の分類: Ω -スペクトラムによる方法

上述の群コホモロジーによる bosonic な SPT 相の分類は低次元においては有効だが, 高次元だと不十分になることが知られている [?]. 現代的には一般コホモロジー理論によって分類するのが良いとされている [?]. その際には, そもそも局所ユニタリ発展は使わずに SPT 相を定義する.

^{*12} より正確には G が離散群でかつ on site symmetry のとき